Osaka Shoin Women's University Repository

清慎公集・義孝集続稿

竹内美千代

一

先年樟蔭文学13号に記してより後に、諸賢より御教示をいただき、数冊の写本を見ることが出来たので、前稿を補足するために筆をとった。

清慎公集について見得た写本を挙げると、

静嘉堂文庫蔵

イ　清慎公家集（82・44・15216）伊藤文庫の印がある。

ロ　清慎公家集（521・11）屋代弘賢の不忍文庫の印がある。

ハ　清慎公集（82・44・15213）家集部類巻三、岸本由豆伎の天保十年の序があり、百枝筆、桜井光枝の書入れがある。

ニ　清慎公集（503・11）信実朝臣集と合冊。丹鶴叢書の表紙をもつ。

島原の松平文庫蔵

ホ　小野宮清慎集（135・3）

彰考館蔵

ヘ　清慎公集上下（小・一八三・己・七）上は二〇枚、下は一三枚。小山田与清の極書がある。

Osaka Shoin Women's University Repository

右の六写本は小異はあるが、大差なく同系統のものである。前稿A表と較べて御覧いただけば明らかである。
A表その二（重複をさけてA表は略す）

A表　その二

歌番号	静嘉堂本イ 清慎公家集	同ロ 清慎公家集	同ハ 清慎公集	同ニ 清慎公集	松平本 小野宮清慎集	彰考館本 清慎公集
1						
12	いひさして	いひそめし（書入れ）		いでそめし（本文）	いでそめし（本文）	いでそめし（本文）
13		○		○	○	○
81	くちなしの			かへりなは（本文）	かへりなは（本文）	
82	うきながら			○	○	
90	90欠	90欠	ととむとも	ととむとも	ととむとも	90欠
104	さか〳〵しくも	さか〳〵しくも	さか〳〵とも	にはさか〳〵しくも	にはさか〳〵しくも	にはさか〳〵しくも
121	桜花					
141	よをさむみ	さよふけて	よをさむみ	よをさむみ	よをさむみ	よをさむみ
145	ちゝにつけ	ちちに	冬につけ	ちゝにつけ	ちゝにつけ	ちゝにつけ

Osaka Shoin Women's University Repository

168……158……155	総数 167	重出 121 158
さよふかく…（重出 141） 桜花（重出 121） うつろはぬ		実数 165 141 155 (一)90 ととむとも
168……158……155	総数 167	重出 121 158
（同） （同）		実数 165 141 155
168……158……155	総数 168	重出 121 158
（同）		実数 166 141 155
168……158……155	総数 170	重出 121 158
（同） （同）		実数 168 141 155 (十)いでそめし かへりなば
168……158……155	総数 170	重出 121 158
（同） （同）		実数 168 141 155 (十)いでそめし かへりなば
168……158……155	総数 168	重出 121 158
（同） （同）		実数 166 141 155 (十)(一)いでそめし 90ととむとも

これらを通覧して言えることは、

1 今度の六写本と前稿の三写本（神宮文庫本・書陵部本甲・乙）とは、同系統で小異あるに過ぎない。

2 歌数は左のとおりである。

170首　松本文庫本・静嘉堂本ニ

169首　書陵部本甲

168首　神宮文庫本・静嘉堂本ハ・彰考館本

Osaka Shoin Women's University Repository

167首　書陵部本乙・静嘉堂本イ・ロ

3数の順序や詞書と歌とのつづきに大きな差異はない。

4異同のある歌について述べると

　女おとゝやいかゝのたまへりけん

12いひさしてたゞこそ死なめ水茎の流るる底の心知らねば

　おとこ

○いでそめし水の心しきよければ千年ふるともにごりしもせじ

　かへし

13雨降れば濁らぬ水も聞えねばまづ山の井に疑はれける。

「いでそめし」の歌は、続国歌大観本・静嘉堂本イ・ハの三本になく、静嘉堂本ロには書入れとしてあり、神宮文庫本・書陵部本甲・乙・静嘉堂本ニ・松平本・彰考館本にある。13の歌は「いでそめし」の歌の返歌と見るべきで、12の返しとしては13の歌はぴったりしない。「いでそめし」の歌は12と13の間にあるべきである。43「ほととぎすみ山を出でぬものならば」の歌は、神宮文庫本だけ欠いていて、他の八本は入つている。41・42・43・44は一連の贈答歌として続いているべきもので、神宮文庫本のは落したものであろうか。

　八月二十八日嵯峨野の花を御覧じて

81口なしの色をぞ頼む女郎花今宵は野べにいざ止まらむ

と六本はなつているが、静嘉堂本ニ・松平文庫本は左のようである。

　八月廿八日さかりの花御らんじて

81くちなしの色をぞたのむをみなへし花もめでつと人にかたるな

　かへり給ふとて

○かへりなばうらみもぞする女郎花こよひはのべにいざとまりなん

Osaka Shoin Women's University Repository

これは拾遺集巻三秋に、小野宮太政大臣として静嘉堂本ニの81のように「花もめでつと…」として入つている。玉葉集巻四秋上に、清慎公として○印の歌が載つている。この歌はもと81と「かへりなば」の二首があつたのが、後に81の上の句に○印の歌の下の句を継いで一首として流布本の81の歌が出来たのであろう。写本を見てその過程がわかつておもしろい。

90の歌は静嘉堂本イ・ロ・彰考館本は欠けている。

内侍督が家に権中納言実資がわらはにて侍りける時弓射にまかりたりければ物書かぬ草子を賭物にして侍りけるを見侍りて

89いつしかとあけて見たれば浜千鳥跡あることに跡のなき哉

返し

90ととむともかひなかるらむ浜千鳥二人(ふりぬる)ぬる跡はともにきゝつつ

と六本にはなつている。90は内侍督の返歌なので、清慎公の歌だけにして、返歌を省いたと見れば90を欠く理由はたつわけである。拾遺集巻九雑下に

内侍督が家に右大将実資が童に侍りける時碁打ちに罷りければものかゝさぬそうしをかけ物にして侍りけるを見侍りて　小野宮太政大臣

いつしかと明けてみたれば浜千鳥跡ある毎に跡のなき哉

返し

止めても何にかはせむ浜千鳥ふりぬる跡は浪に消えつつ

とよく通じるようにして入つている。

104は義孝集が混入した起点と考えられる箇所であるが、今回見た六写本とも、上の句のない下の句だけになつている。これは義孝集の14「こひにのみ惑へる人の心にはさか〳〵しくも見えぬなるらん」と同じ歌であるが、

さか〳〵しくも見えぬなるらん……神宮本・書陵部本甲・静嘉堂本イ・ロ・ハ

Osaka Shoin Women's University Repository

にはさか〳〵しくも見えぬなるらん……書陵部本乙・静嘉堂本ニ・松平本・彰考館本

と二系統になつている。その中書陵部本乙は注目すべきもので、104の歌が綴じ目に来ていて、これ以後錯簡を生じたことを思わせるのであるが、（前稿31ページ写真参照）103以前と104以後とは全く同筆でこの本が錯簡を生じたもとの本ではない。他の写本では全部104の歌がページの中間になつていて、錯簡の事情を考える手がかりにはならない。

121と158に重出する「桜花山に咲くなむ里のには勝ると聞くを見ぬが佗しき」と・141と155に重出する「夜を寒み立つ川霧にあるものをなくなくかへる千鳥悲しな」は六本共に共通している。

5奥書は、書陵部本甲（前稿19ページ）が最もくわしく、神宮文庫本・静嘉堂本ニは最初の校合者平業通までの奥書で以下を欠き、静嘉堂本イ・ロは一ページ空白で、平業通までの奥書を欠き、第二の校合者尋阿と第三の校合者藤氏の奥書とがある。尋阿の校合は書陵部本甲だけが永亨三年孟夏下旬であり、他はみな永亨二年孟夏下旬である。

二

つぎに現存写本に見える清慎公集最初の校合者、従三位行知部卿平朝臣業通については、今回見得た六写本についても、静嘉堂本ハ・ニ・松平本・彰考館本には明瞭に業通と見え、後の二本には記されていない。従つて「平業兼」と見えるのは書陵部本乙たゞ一本のみである。しかし前稿に述べたとおり私は「平業兼」が正しいと考えている。

平業兼については、公卿補任の元久二年の記事を最後と思つていたが、それより二年後承久三年（土御門天皇一二〇九）正月に、治部卿を辞し、同年五月十三日に出家している。

Osaka Shoin Women's University Repository

承元三年五月十三日乙巳　従三位平業兼出家ス　非参議従三位平業兼、五月十三日出家、故正五位下行左衛門佐相模守業房一男、母従二位高階栄子、寿永二正月二十二日任大膳亮、文治元年正月廿日叙爵、任美乃守、十一月廿七日任民部権大輔、守去、十二月廿九日改業隆為業兼、同二年正月五日叙従五位上、同五年正月五日叙正五位下、建久三年正月五日叙従四位下、同六年十二月九日叙従四位上、罷民部大輔叙之　同九年正月五日叙正四位下、建仁二年閏十月廿四日任治部卿、元久二年正月二十九日叙従三位・治部卿如元、承元三年正月十三日辞卿、以男業光申任侍従。　（公卿補任）

尊卑分脈　平氏

使
業房（左衛門佐、正五下、相模守、木工頭）――業兼（治部卿、従三、母従二高階栄子）――業光（宮内卿、正四下）

業兼の官歴世系便ニ依リテ姑クココニ合敍ス　（大日本資料）

とある。推察通り治部卿は業兼の最後の官である。出家後何年生存したかわからないが、以後は資料に名を残していない。恐らく余り久しくない頃に歿したのであろう。母従二位高階栄子は権勢ある人として記事が豊富である。史料綜覧を見ると、順徳天皇建保四年十二月二十九日の条に、

従二位高階栄子（丹後局）薨ズ　諸記纂、公卿補任、尊卑分脈、本朝皇胤紹運録、歴代編年集成、玉葉、愚管抄、明月記、山科御影堂領之事、吾妻鏡、山槐記、源平盛衰記、百練抄、〔参考〕山城名勝志、山州名跡志

と見え盛に活躍したことが資料に出ている。母高階栄子の薨じたのは業兼出家の年より五年後である。また公卿補任に

前権中納言正二位藤原教成、四十、二月二十一日　服解（母）　（公卿補任　十六）
（業兼ノ弟、藤原実教卿為子）

Osaka Shoin Women's University Repository

とあるのは、この時業兼は生存していなかつたのではなかろうか。あるいは業兼は出家の身なので、高位の弟教成の解服を記したのであろうか。本朝皇胤紹運録・女院次第等によると、高階栄子はもと丹後局といつて後白河院に仕え、宣陽門院（覲子）を生み、後平業房の妻となり、業房との間に業兼、教成を生んでいる。父業房は左衛門佐、正五位下相模守どまりであるのに、業兼が従三位治部卿まで進み得たのは、母の力による所が多かつたのではないかと考えられる。栄子は玉葉によると、夫亡き後、後白河法皇の幽居に侍し、法皇崩御によつて出家した。吾妻鏡によれば関東方とも交渉があり、頼朝から白綾、桑糸等を贈られており、栄子も頼朝に扇を贈つたりしている。栄子は晩年まで活躍しているがその子業兼は、母より先に没したかあるいは出家して社会の表には出なかつたのであろう。業兼の文学活動は資料や歌集等では見ることは出来ないが、和歌や文学に関心をよせ、晩年に清慎公集の書写校合の事をしたものと考えられる。

三

義孝集は既に昭和三十二年に九大国文学会発行の「語文研究」に、今井源衛助教授が、〃正安本「義孝集」翻刻と校異〃を御出しになつていたのを、前稿の際には存じ上げず失礼した。幸い今井氏より「語文研究」を御恵送いただき、有益な御教示を賜わり感謝している。

今井氏は私が書陵部本乙と呼んだ正安元年十一月十二日書写の奥書あるものを、〃正安本〃として底本とし、九大本・書陵部本甲・同丙・彰考館本を以て校異翻刻されたので、義孝集研究には貴重なものである。諸本の解説や義孝集の性格については稿を改めて述べることとして、触れられていない。私が其後に見た写本は彰考館本と松平文庫本とであり、両書とも流布本系統の群書類従本と大差はない。今井氏の校異と併せ考えると、義孝集の諸本の系統は左のようである。

Osaka Shoin Women's University Repository

- 義孝集
  - 流布本系統
    - 群書類従本（続国歌大観）　藤原義孝集　藤原義孝集　刊本
    - 九大本　細川文庫　藤原義孝集
    - 彰考館本　藤原義孝集
    - 松平文庫本　義孝集
  - 異本系統一（正安本系統）
    - 書陵部甲本　義孝集（五〇一、二七三）
    - 書陵部乙本（正安本）　義孝朝臣集（一五〇、五七六）
  - 異本系統二
    - 書陵部丙本　義孝集（一五〇、五七七）
    - 書陵部丁本　義孝集（五〇一、七一七）

流布本系統では、群書類従と続国家大観に収められているのが刊本として見やすいものである。続国歌大観には明記していないが、群書類従によつたと思われ、歌数や歌の順序詞書など全く同じで、漢字の当てかたや濁点くらいの相違である。

九大本は伝覚源筆といわれ、今井氏は室町初期書写と見ていられる。（語文研究六・七号）牛庵の極めがある由、覚源筆か否かについては、私には何とも言えない。水戸の彰考館蔵の義孝集には、「右文化十四年七月三日覚源筆之本を以校正了」とあるから、近世に於ては覚源筆の本が尊重されていたのであろう。

覚源は藤原定家の子で、母は身分の低い者であつたらしい。尊卑分脈に「山・法印・権大僧都」とある。阿闍

Osaka Shoin Women's University Repository

梨・法眼・僧都・法印に進んだという。歌は勅選集に左の三首が見える。

父前中納言定家すみ侍りける家に年へて後帰りまうできて昔の事を思ひいでてよみ侍りける　法印覚源

面影はあまた昔の古郷に立ちかへりても音をのみぞなく（続拾遺集　一八　雑歌下）

曇りなく心のそこにうつるらむもとよりきよき法の鏡は　法印覚源（続拾遺集　一九　釈教）

父母所生身即澄大覚位の心を　法印覚源

誰れ故に此度かゝる身を受けて又ありがたき法にあふらむ（新後撰集　九　釈教）

いずれも道心厚きすぐれた僧侶らしい歌である。村山修一氏の「藤原定家」によると、覚源は母不明の子供の一人で、明月記（嘉禄二・十一・三）の記事によつて建保三年（一二一五）に出生したと思われ、天福三年（一二三三年）十一月五日、為家につれられ吉水で出家した。時に十九才、阿闍梨になり、嘉禎三年（一二三六）六月三日に良快僧正に従つて、葛川参籠に同行しているようである。その後法眼・僧都・法印とすゝみ、権大僧都に至つた。吉水で出家して以来青蓮院関係の僧として活動し、「中納言阿闍梨」とも呼ばれた。

とある。村山氏の定家略年譜によると、覚源出生の建保三年（一二一五）は、定家五四才に当る。覚源の歿年は不明であるが、十九才で出家し仏道に精進し、法印・権大僧正まで上つた頃には、かなり高齢に達していたであろう。経文や仏典の書写なら若い頃からも行なつたであろうが、歌集などの書写は余裕の出来た晩年に近いと思われる。

父定家は多くの典籍を書写しているが、病身で外出の出来難くなつた六十才以後八十才の歿年に及ぶまで、不自由な身を孜々として書き続けたのは歌集、物語等であつた。覚源は定家の遅い子であり、覚源十九才で出家の時は、定家は七十二才頃になつていたはずである。従つて覚源は晩年の定家に多くの影響を受けたものと考えられる。それ故父定家の手をつけない私家集の義孝集などを書写したと見ることも自然である。しかし覚源が書写

Osaka Shoin Women's University Repository

した年代は不明である。父の影響を考えると覚源書写の年は必ずしも晩年に限ることもなく、大体四・五十才以後でないかと推測する。とすると一二六〇年から一三〇〇年よりは余り下るまいと考えられる。正安本義孝集の書写された一二九九年と近接する時期、即ち鎌倉末期ということになるわけである。この臆説は覚源筆という事を前提としての事だから、覚源筆に疑いがあればまた別に考えねばならない。

水戸の彰考館蔵の藤原義孝集は、小山田与清旧蔵本で、「右文化十四年七月三日覚源筆之本を以校正了」と奥書がある。家集四部（信明・義孝・仲文・順）の中に収められている。歌数・順序・詞書など全く九大本と同じである。

島原の松平文庫本は書写年代は明らかでないが、江戸中期以後の書写ということである。藩公が祐筆に命じて、大量に古本を書写させた際の本という。従つて流布本系統の本では九大本が最も大切なものと言うべきであろう。

異本系統を二つに分けたのは、甚しく差異があるからである。異本系統の一は、流布本に近く、歌数も七七首、歌の順序にすこし前後するところがあるのみで、大きな差異はない。正安本は「正安元年十一月十二日於西山往生院草庵書写了花押」（前稿二九ページ参照。花押の主は不明）の奥書がある。書写年代の明かな唯一の貴重な本である。正安本と同系統の書稜部甲本とは、外題「義孝集」が同筆であつて、霊元天皇宸筆と伝えられている由である。霊元天皇の御在位は（一六六三―一六八四）寛文・貞享の頃、元禄の前江戸初期である。たゞし外題と内部とは筆者は異なつている。

異本二の系統は流布本と甚しく違つている。（前稿B表参照）歌の順序も前後し、歌数は六八首であり、56の歌に53の詞書がつき、清慎公集と重複する起点となる14の「こひにのみ惑へる人の心にはさか〳〵しくも見えぬなるらん」の歌を欠いており、巻末に19の「忘れどかく忘れど忘られずいかさまにしていかさまにせん」の歌が来ているなど、系統が別であることが著しい。この系統の二本は全く同じ内容で、奥書がない。両者は義孝集の流布本とは大きく異なつているが、歌順序や欠けた歌などは、清慎公集と共通した点が多いのはおもしろい。

Osaka Shoin Women's University Repository

今度見た彰考館本と松平文庫本は流布本系統で、大きな相違はないので、義孝集の内容に関しては前稿を補うべきものはない。

四

以上清慎公集と義孝集について、管見に入つた写本を比較してみたが、義孝集の混入する前の清慎公集を見つけることは出来なかつた。鎌倉初期に平業兼が清慎公集を校合した（一二〇四年、業兼・治部卿）時には、既に義孝集を包含して居た。それより九五年後の正安元年（一二九九）には、清慎公集と重複した義孝集が存在していた。

清慎公集と義孝集の重複については恐らくかなり古くから気付かれていたものと思う。書陵部にも、松平文庫にも、彰考館にも、清慎公集・義孝集を共に蔵しているのである。殊に彰考館本は両集とも小山田与清の旧蔵本というから、与清は気付いていたであろう。しかしそれについては記録がない。前稿で私はそれに言及した人はなかつたと記したが、今井氏のお教えにより、「静嘉堂蔵本の家集部類巻三（82・44・15213）の清慎公集の奥書に、桜井光枝なる人が書入れをしている事を知つた。すなわち桜井光枝が両集混入のことに触れた最初の人となるわけである。家集部類には、

此本清慎公集と題号あれども義孝少将の歌おほく入れり。按ずるにはじめは清慎公家集也。なかばよりすゑは藤原義孝集なるべし。其中に他人の歌もまたまじれり。天保七年校合なせる本を以て同十年正月十日ふたたび校合遂。　桜井光枝

と業通・尋阿・藤氏の奥書の後に、朱で書入れを行なつている。桜井光枝は如何なる人であろうか、その号からして国学の流れを汲む幕末頃の人であろうと考えていた。静嘉堂文庫の丸山季夫氏から、狩野快庵の狂歌人名辞典に、光枝が出ているとお教えいただいたので記してお礼申しあげる。「光枝、花廼舎光枝、通称桜井伊兵衛、東都日本橋釘店に住す。二世花廼舎蛙麿の師。安政年間発狂して歿すという」（狂歌人名辞典）[三]

Osaka Shoin Women's University Repository

同著の附録に二代以上継続した狂歌師の人名録が出ている。

花廼屋道頼―二世花廼屋光枝・桜井氏―三世花廼屋蛙麿・達磨屋

とあるので、桜井光枝は狂歌師花廼屋光枝であり、花廼屋蛙麿は三世で、二世とあるのは誤植であろう。人名辞典では光枝を「テルエまたはテルエダ」とよんでいる。菅竹浦の狂歌書目集成には「ハナノヤミツエ」とよんでいる。狂歌書目集成によると、光枝の撰になる狂歌の書が三冊見えている。

狂歌尋蹤集　花の屋光枝撰　天保四年刊　江戸
狂歌春葉集　花の屋光枝撰　天保六年　江戸
歳時記図会　千種庵、五朶園、花の屋光枝合撰　弘化三年　江戸

「雅言集覧」「源注余滴」の著者石川雅望が、宿屋飯盛の戯名で狂歌を嗜んだごとく、桜井光枝は天保の頃、名ある狂歌師である一方、真面目な国学者であつたものと考えられる。それは光枝の弟子である花廼舎蛙麿は日本橋の書肆達磨屋五一といい、「燕石十種」「群書輻輳」の著があることが、狂歌人名辞書に見える事からして、逆にその師光枝が国書に関心を持ち、清慎公集の校合をするような国学者であつたのではないかと推測出来るのである。

桜井光枝の書入れある静嘉堂本ハ清慎公集は、家集部類巻三に収められ題筌はない。この本と類似している静嘉堂本ニ清慎集は、信実朝臣集と合冊のもので、丹鶴叢書の表紙を持つているという。丹鶴叢書は幕末に、紀州熊野新宮の城主、水野忠央が編輯発行した叢書である。数量は群書類従に及ばないが校正精美な点は注目に価すると、赤堀又次郎は賞讃している。この叢書の実際の仕事は、水野家の臣であつた国学者山田常典が主となり、その師本居内遠の指導や、多くの国学者の協力によつた事は、叢書の緒言に明らかである。清慎公集は丹鶴叢書の中にないが、信実朝臣集は丹鶴叢書中にあることは目録に見えている。従つて静嘉堂本ニは、信実朝臣集と合冊になつたために丹鶴叢書の表紙がついたものと思われる。丹鶴叢書についての詳しいことは調べていないが、

Osaka Shoin Women's University Repository

山田常典のもとに丹鶴叢書の事業に参加した学者の一人に、桜井光枝が居たのではないかと思うのである。この方面は今後さぐつて見たいと思つている。

わが国の文学が平安貴族の間から生まれ、中世の隠者の手に保存書写研究せられ、近世の国学者に受け継がれたという大方の運命を、この清慎公集も義孝集も共に荷つて来たということが出来ると思う。両集を追求してみて、両集混入の実態は摑めなかつたが、前稿の結論――現存の清慎公集から104番以下の歌は削除すべきこと。その後一枚又は数枚を以て原清慎公集は終つていたものであること。現存義孝集は原型に近いものであつて、清慎公集と重複する部分は、義孝集の歌である。――という考えは動かない。

近来私歌集の研究は活発となり、有益な成果が次々と発表されている。桂宮本叢書の刊行や、和歌文学会の和歌集研究の企てや、今井源衛氏の義孝集翻刻、峯岸義秋博士の躬恒集翻刻、森本元子氏の私歌集研究等、近代の光が暗黒面を照らし出して来ていることは同慶の至りである。今後更に此の方面の研究が進んで、何時の世にか義孝集の混入以前の清慎公集が発見されることを、私は待ち望むものである。

（一九六三・九・一）